

「分かりやすさ」と「分かりにくさ」の構造
…「日常的言語表現の論理」序…

高頭直樹

1

公の場で、自分の考えを明確に表明し、その主旨を相手にはっきりと理解させることや、意見を異にする人々と自由に論議し、そこから合理的な結論へ到達できる理解力と口語表現能力の必要性が叫ばれている。このような能力は、言語を使う際の当然の前提のように思われるが、実際の状況では必ずしもそうとはいえない。明確に自分の主張を相手に伝えたり、相手の主張の論旨を正確に捉えるには、われわれが普段考えている以上の努力が要求されるのである。実際ある発言を理解しようとする、「分かりやすい」発言と「分かりにくい」発言が存在することに気付かない人はいないであろう。容易に主張の論旨を捉えることのできる場合もあれば、一向にその主張の骨子が見えてこない場合もある。いったいそうした相違はどのような条件のもとで生じるのであろうか。聞き手の側で感じられるこうした問題は、当然ながら、我々が話し手となった場合にも生じていることにもなる。「分かりやす」く話すことや、自分の主張が相手に容易に理解されるためにはどのような条件が充たされていなければならないのであろうか。

相手に分かりやすく話したり、話が説得力を持つためには、当然のことながら話の「論理性」や論理的思考力が要求される。しかし日常的言語表現の「論理」は、人工言語の持つ形式的論理性によって尽くされるものではない。我々が日々の論議に於て使用する自然言語は、人工言語にくらべ、著しく曖昧、不明確であり、またそれ故にこそ、はるかに豊かな表現力を持つことにもなる。日常的言語によって主張され展開される論議は、論旨に整合性を欠いていたり、飛躍があったりするが、時にはむしろそうしたことによって聞き手に共感をあたえたり賛同を勝ち得たり、様々な効果を生みだしていることも事実なのである。

我々はこの複雑、曖昧な日常的言語を使って日々、対話し議論している。その対話や議論が遂行可能な理由の一つは、話し手と聞き手の間に共有された了解が存在するからである。この了解事項は多くの場合、明確に意識されていることはないし、実はそう簡単に「共有される」わけでもない。むしろ我々の会話や議論はこの「共有される了解」を探しもとめる過程だと考えることができるのではないか。これが本論の根底にある仮説である。

しかし、ひとたびこの了解事項が明らかにされると、我々が分かりやすいと感じたり、分かりにくいと感じたりする発話の違いは、甚だ単純な「形式」に基づいて判定されるように思われる。われわれが明快に話しを進めるときは、実はこの「単純」な論理にしたがっている場合だと考えられるのである。もちろん実際の場ではこの単純な形式は、幾重にも重なり合い、複雑な論理を形成しており、ここでの単純化された構造分析が、そのまま実際の場面に適応できない面もあろう。しかし、この「分かりやすさ」と「分かりにくさ」の構造は、我々が直面する様々な場面で自分の価値観を前提にして結論を導く「実践的」

推理の構造を理解する上でも適応できるのではないかとと思われる。

価値の加わる実践的推理は形式的論理では容易に処理することはできないし、その結論を相互に了解しあう過程はさらに複雑な構造を持っているように思われる。しかしその基本的構造は以外と単純な形式を持っているにすぎないのではないか。ただそれは前提－結論という、一本の線ではすまされない甚だ入り組んだ重層的関係で形成されていることは確かである。しかしこの実践的推理の構造も、『「共有される」了解を探しもとめる過程』として対話や議論の構造を明らかにできれば、同様な構造として明らかにできるのではないかという見通しをもっている。それはあくまである程度という注釈を必要とするレベルに止まるが、しかしその基本的構造は捉えられるのではないかと考えるのである。最終的にはここで試みる日常的対話、議論の構造の解明を倫理判断を導く推理の構造へと拡張したいと考えているが、本論ではその予備的研究として発話の「分かりやすさ、分かりにくさ」の基本構造を明らかにすることに限定して考察を進めていくこととする。⁽¹⁾

2

前節で単純な「形式」という表現を使ったが、これは誤解を招くことになるかもしれない。ここでは、その「単純な形式」として、 $P, P \supset Q \rightarrow Q$ を念頭に置いている。しかし日常言語の理解のためにこの推論式を導入しようとするれば、当然ながら $\supset$ や、 $\rightarrow$ を、論理的含意としてそのまま解釈するわけにはいかない。ここでの基本構造はレッシャーが議論での主張の構造として挙げた P/Q に対応するものと考えらるべきであろう。レッシャーは「条件付き主張」と呼ぶこの構造を次のように規定している。

「 Q ならば、一般的に(普通あるいは大体) P が成り立つ」あるいは「 Q が成り立つとき、他のことが同じであれば P が成り立つ」あるいは「 Q のとき、他のことがおなじならば P 」あるいは「 Q が成り立つとき、すべての(あるいはほとんどの)通常の状態(あるいは可能世界)において P が成り立つ」あるいは「 Q は P にたいして一応証拠をなしている」を表すのに P/Q を使う。

⁽²⁾

さらにレッシャーは続けて次のようにも言う。

「ふつうの自然の成り行きでは、アメリカ人は英語を学び、魚は哺乳動物ではないし、人間は推理することができ、鳥は飛ぶことができる。また、このようなもののすべての組み合わせが条件付き主張のもととなる。しかし、このような状況のどれも必然的なものではない。… Q が与えられると P と想定することが常識的だということであり、あくまでも常識的なものであって、確実なことではない。」⁽³⁾

もちろん、ここでの最大の課題は、レッシャーが指摘する「 $\rightarrow$ 」を、論理的含意としてそのまま解釈するわけにはいかないというなら、「含意」関係を日常的対話の場でどのように解釈できるかということである。ここでは先に限定したように対話に先立つ、話者の

発話が、どのように聞き手によって「理解」されているのかという、もっとも基本的な構造を探ることになるが、この探究がこの「含意関係」の一つの解釈を与えることにもなると思われるのである。

たとえば次のような何の変哲もない二つの発話にはどのような違いがあるかを考えることから始めることにしよう。

(1) -1 今日から6月だね。

-2 来週も雨だよ。

(2) -1 この辺の夜道は、暗くてね。

-2 子どもたちには安全だよ。

常識的に考えると、(1)は聞き手にとって容易に理解できる発話であるといえよう。それに対し(2)の聞き手は、この発話からだけでは、話者の意図する発言内容を、容易には理解できないであろう(少なくともこの発言には怪訝に思うところがあるだろう)。その違いはどこから生じるのであろうか。

いまここで(1)を「分かりやすい発話」、(2)を「分かりにくい発話」と呼ぶこととする。(1)が分かりやすい発話となっている最大の理由は、(1)-1が発話されたとき、聞き手がこの発話から次に発話されると予想、または期待することがらと、それに実際に続いた(1)-2での発話の内容が合致していることである。もちろん「合致」は厳密な意味の合致ではない。「予想」や「期待」も、(1)-1を聞いたすべての聞き手が共通して抱く予想や期待でもない。日常的言語表現が聞き手にもたらすこの種の働きかけは、極めて漠然とした曖昧なものにすぎない。日常的言語表現が何らかの内容を「必然的に」聞き手に伝え得ると前提にすることは不可能と言うべきだろう。しかし我々は、ある発話を聞いたとき、その発話が持つ内容の広がり、いわば「インプリケーション」を察知する。聞き手はその発話(言語表現)⁽⁴⁾が内に含む意味の広がりを受け取り、その意味の広がりの中で、次の発話(1)-2が発せられることを予測または期待するのである。(1)の発話では発言者が(1)-1を発話したときこの表現にこめたインプリケーションと、聞き手がこの表現から受け取ったインプリケーションがほぼ一致したと考えられる。聞き手が(1)-1から期待した「インプリケーション」をもつ会話が次に続いたということが(1)の発話を「わかりやすく」しているといえるのである。

それに対し(2)の(2)-1から(2)-2に展開した際、話者と聞き手の間にはインプリケーションの連鎖が存在していないということである。聞き手が(2)-1を聞いてそこから受け取ったインプリケーションから期待したものと異なったインプリケーションをもつ表現が(2)-2で発話されたのである。要するにわかりやすさの条件は、話者と聞き手が表現のもつインプリケーションを共有しているかどうかにある。

3

ところでこのようなインプリケーションの共有は実際の場面ではそう簡単に実現しない。日常的言語は「分かりあえるはず」という「共有」された大前提に基づいて初めて機能していることは疑いようもないが、具体的文脈での発話の持つインプリケーションとなると、話者と聞き手が共有できない場面がしばしば生ずるのである。もっとも単純な形態をとる対話の始まりは、一つの言語表現がどのようにして相互に共有されるインプリケーションを持つに至るか、その探求の過程だと考えるのがここでの議論を支える仮説である。下の図（1，2）を参考にこの仮説を整理してみよう。

図 1

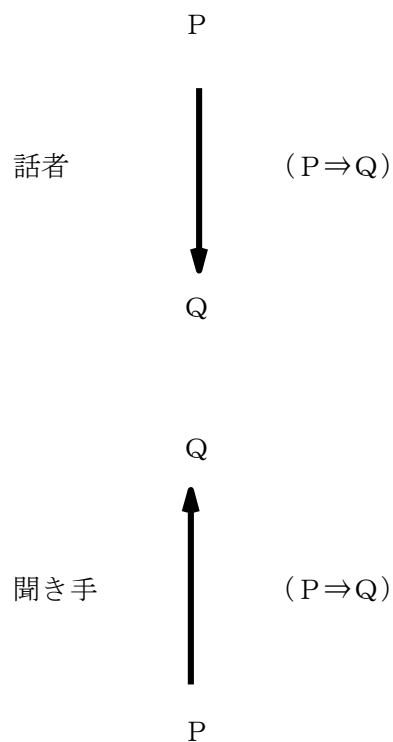
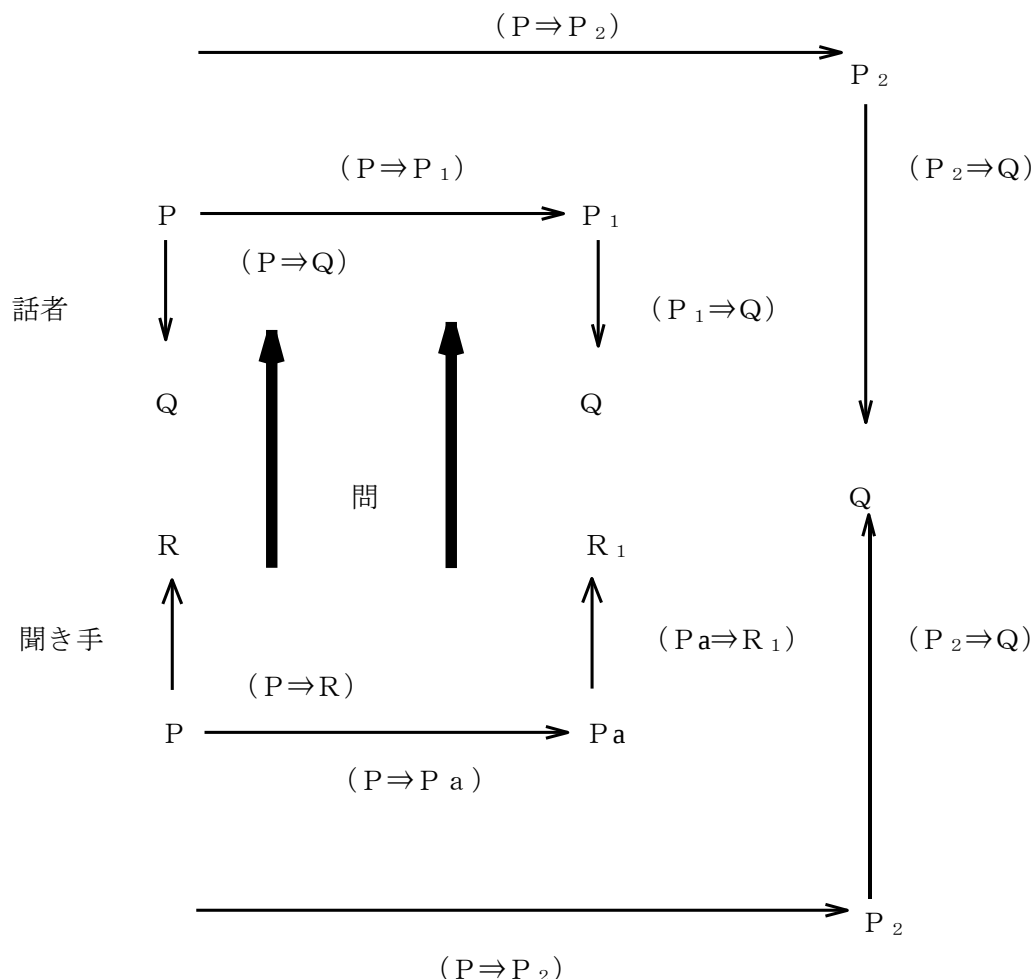


図 2

主張 (assertion) の構図



$P \Rightarrow Q$ の解釈 :

日常的状況において、話し手の言語表現 P は、聞き手に言語表現 Q によって、通常理解される状況を想起させる。(言語表現 P は言語表現 Q を **imply** する。または、言語表現 P は、言語表現 Q を **implication** として持つ。

図(1)は、一つの発話が、聞き手に理解される基本的過程を示したものである。ここで再び先の例、(1)と(2)を使って見ることにしよう。いま P を(1)-1、 Q を(1)-2とする。話者が P と発話し、 Q とつづけようとしているとすれば、話者の側には、 P を聞いた聞き手が $P \Rightarrow Q$ を想起することを予想しているものと考えられる。話者が「今日から6月だね。」といったとき、聞き手は、この発話表現のもつインプリケーションに含まれる意味が、次の発話によって表現されることを期待する。もちろん言語表現とインプリケーションの関係は一意的な関係でないことは先にも触れたとおりである。インプリケーションは、あくまで「インプリケーション」であって、一つの言語表現とインプリケーション

ョンの関係は「話者と聞き手の関係」あるいは話者と聞き手のおかれている状況に依存することになる。

いまPの例で、話者と聞き手がPのインプリケーションとして、たとえば「毎日のように雨が降る」を共有していれば、話者が(1)-1に続き(1)-2を発話すれば、聞き手は自分自身が(1)-1から予想していた、発話へと話題が進んでいることを理解する。話者と聞き手は共に $P \Rightarrow Q$ を共有しており、話し手の話はインプリケーションにしたがって行われたことになり、聞き手にとってはきわめて分かりやすい発話だったということになる。ただしこの話題での二人の対話は、この例ではここで終了することにもなる。聞き手はせいぜい同意の相槌を話者に送り、次の話題への展開を期待するか、役割を変更して自らが話者となって新しい話題を提案するほかないのである。

一方図(2)のプロセスは少し違っている。これは先の例でいえば、(2)に当てはまるであろう。ここでは話者が $P \Rightarrow Q$ を前提に、たとえば、 $P =$ 「この辺の夜道は、暗くてね」と発話したのに対し、聞き手がPから受け取ったインプリケーションはQではなくRであり、話者が次につづけたQは聞き手にとって、今く予想外の、期待していたものと全く異なる展開だという状況である。聞き手にとって話者の主張はこの段階で「分かりにくい」ものとなる。話者は $P \Rightarrow Q$ を、聞き手は $P \Rightarrow R$ を前提にこの状況にたっていることになり、Pのインプリケーションは、双方の間に共有されていないのである。この場合聞き手は当然ながら、なぜ話者が $P \Rightarrow Q$ を前提にしているのかと問う。話者はその問いを発せられることで、聞き手との間にインプリケーションを共有していないことを知るのである。話者は聞き手からの問いに答えることによって聞き手との溝を埋める努力をしなければならない。この溝を埋めなければ話者の発言は「分かりにくい」話して終わってしまうのである。話者が次に踏む過程は、 $P \Rightarrow P_1$ を介し $P_1 \Rightarrow Q$ と話を展開し、聞き手と $P \Rightarrow P_1$ と $P_1 \Rightarrow Q$ の二つのインプリケーションを共有できないかと探ることである。先の例で言えば、聞き手は $P =$ 「この辺の夜道は、暗くてね」から $Q =$ 「子どもたちには安全だよ」というインプリケーションを持つことができないという合図として $P \Rightarrow Q$ への問いが発せられた以上、話者は、Pのインプリケーションとして聞き手と共有できる P_1 を見つけなければならない。例えば話者が「 $P =$ 暗いところは、 $P_1 =$ 警察や、近所の人々の警戒心が強い。だからかえって $Q =$ 子どもたちには安全だよ」という $P \Rightarrow P_1$ 、 $P_1 \Rightarrow Q$ というインプリケーションの連鎖が共有できることを期待して、聞き手の問いに答えて P_1 と発話する。もしも聞き手が今度のインプリケーションを共有できれば、ここで一つの主張は完結する。しかしこの発話でもインプリケーションの共有がなければ、さらに問いは発せられ、それにたいする応えとして対話は続くことになるのである。今ここで描いた「分かりあうため」の過程が対話の基本形と考えられるなら、「対話」は「分かりにくい」発話があることによって継続して行くことになる。分かりやすい発話は、図(1)の様にお互いに共有されたインプリケーションを繰り返しているにすぎず、実は何の発展性もない発話ということになる。最も分かりやすい発話は、形式的に見れば同語反復ということになるであろうし、ここで見ているようには、いわゆる「諺」や「クリシュ」とよばれるものなどは、一つの発話が

られる。ここでの P_1 は例えば（A、Bともに暇があれば映画をみたい）と想定しよう。構図（1）では聞き手Bもこの前提を了解し、対話はスムーズに展開している。 R_1 以降では共有されている Q_1 の前提を了解し、 P_1 の詳細の確認作業に入っていると考えられるのである。（例えばこの「前提」の時空間的制約などを確認しあっていくのである。）

ところが、構図（2）では状況が少し異なっている。Bは、Aの発話 Q_1 の前提が、理解できない。Aは、Bの反応から自分の発話の前提がBと共有されていないことを知り、 Q_2 で、自分の発話の前提、 $P_1 \Rightarrow Q_1$ （A、Bともに暇があれば映画をみたい）の提示を試みている。しかしBはここでも「前提」の共有を、すなわち、 $P_1 \Rightarrow Q_1$ を拒否しているのである。したがって、Aとしては、自分の考えをBに理解してもらうためには、さらに共有できる前提をさがし、発話を続けなければならない。そうでなければ、異なる話題に転換し、新たな対話を開始しなければ二人の話は途切れてしまう。当然ながら実際の状況ではさらに複雑な過程をへて対話は進むことになる。しかしここでも指摘できるのは、対話を成り立たせる条件、あるいはそこで発話された言語表現が「分かりやすいか」「分かりにくい」かを分ける条件は、ある構造をもっているどうかにかかっているということである。それは繰り返すまでもなく、話者と聞き手の間には、言語表現の持つインプリケーションを相互に共有していることが要求されているということであり、聞き手は話者の発話から受けとったインプリケーションにしたがって話者の発話が展開されるのを期待し、その期待に沿った展開が「分かりやすい」主張となるということである。しかしまた一方日常的文脈では言語表現とその持つインプリケーションの関係が極めて不安定であるという事実がある。しかしこの不安定さこそ、対話の可能性を生んでいるのであり、そこから「共有できるインプリケーションの探究の過程」としての対話の重要な特徴がうまれてきているのである。

5

さらに対話をここで考えてきたように話し手と聞き手の間に共有される言語表現のインプリケーションの探究の過程と考えると、この過程は、具体的価値判断を要求される倫理的判断において、「共有される」倫理的判断に到達する過程の解明にも応用できるように思われるのである。たしかに我々の価値判断が、各個人がそのメンバーとなっている価値体系に依拠していることは否定し難い。しかし各個人はただ一つの体系に属しているわけではない。その体系は、大きくは文化圏、国家から地域、あるいは職業、年代等、様々なグループによって形成されている。我々は実は、そうした様々なレベルの価値体系に同時にいくつも参加しており、我々自身のなかでも価値の対立が生じているのである。我々は具体的場面で価値判断を下すときは、実はそうしたいくつもの、時には相対立する価値体系のなかから一つを選択して、その体系にもとづき個別的判断を下しているに過ぎないだろう。他人との間で価値判断に関し対立が生ずる過程も同様に考えられるはずである。各人は各々の価値体系を選択し、それに基づき判断を下しているはずである。しかし価値判断はその前提となる価値体系が曖昧で、分かりにくい形のまま下される。そのためにその種の判断は相互に理解されることが極めて困難との印象を与えがちなのである。しかしそ

れぞれが判断を下す際、どのようにして、どの体系を選択したか、その過程を解明し、共有できる前提に到達するための過程の構造を明らかにできれば、いわゆる価値の相対性というアポリアのじゅばくから逃れることも困難とは言えないのである。

ここでの日常言語表現の理解の構造の解明はそうした方向へと展開できる可能性を含んでいると考えられるが、そうした方向への展開拡張は次の機会に譲ることとする。

注

(1) 我々が日常的状況で「発言」する場合、その形態はさまざまな形をとる。ここではそのなかでも最も単純な平叙文による「主張」を考えている。さまざまな形態の分類については例えば、以下を参照されたい。

Walton, D. N & Krabb, E. C. Commitment in Dialogue : Basic Concepts of Interpersonal Reasoning 1995 State University of New York Press

(2) N.レシャー：「対話の論理」(内田種臣訳 紀伊国屋書店 1977 pp.24-25)

(3) ibid. P.24

(4) ここでは言語表現に議論を限ってはいるが、ジェスチャー非言語表現に議論を拡張することも可能であろう。

(姫路工業大学)